服部の空白

日本航空高等学校　三年
南　泰圭

自分の正しさに気が付くのは、いつだって今じゃない。

そう書かれたカレンダーが壁に打たれた押しピンによって支えられている。その壁にもたれると、左右に大きく揺れて、落ちてきた。無機質だけれど、整頓された部屋だ。白い骨組みのベッドに、布団が敷いてあって、後は本棚テレビ以外、今目に見えるものはなかった。

クローゼットにはおそらくいくつかの服が入れられているのだろうけれど、それはどうでもいい。

目の前のグラスに注がれた成人の勲章が、氷で少しずつ薄まる姿を見て、思う。

僕の黄金期はいつだっただろうか。無邪気さにかまけていた幼児の頃か、無知を咎められることのなかった小学生の頃か。思春期という免罪符を掲げ、他人を傷つけることを厭わなかったあの頃か。それとも、未だ黄金期は訪れていないのか。

過去を黄金期だと思うのは、その頃の記憶が曖昧になっていたり、時間という毒がその時の熱を侵したりしたからなのだろう。しかし、僕は、あの時を懐かしむことに多くの時間を費やす。

テレビに映る最近活躍し始めた役者は、滔々と語っていた。

「今が一番最高ですよ。あれ一番最高なんて言葉はおかしいか。でも、それくらい、一番で、最高なんですよ」

口の悪そうな目つきなのに、丁寧な言葉で語る。それが妙に鼻に付くし、自分がミニマリストだということを話しながら悦に入っている姿は滑稽ともとれる。

いつだって、今は最高だ。今はかけがえがなく、何事にも代えがたい。

確かに、そうかもしれない。けれど、僕にとっての黄金期は、あの、最期のティーンエイジャーを気取っていたあの時なのだと、胸を張って、言える。

廊下の奥から、足音が忍び寄る。何かの終わりを告げる、何処かの思い出を蝕む、そんな優しさのある歩みが部屋の前でぴたりと止まった。

誰かが、部屋に戻ってくるらしい。

引き戸は、まだ、開かない。

×　×　×

僕の黄金期を語るうえで欠かせない人物が三人ほどいるのだが、そのどれもが出会い方が最悪であるから、正直言えば、話したくはない。むしろ、出会いについては端折ってしまい

たいくらいだ。しかし、最悪の出会いを三件も経ていると、人との出会いなんてのは案外こんなものなのかな、とも思わなくもない。でも、出会いについては語らない。

ちょうど、自分たちの通う大学の近くのコンビニに強盗が出た、という次の日だった。僕は、そのような話もつゆ知らずいつも通り駐輪場に原付のバイクを停めて講堂に向かっている。

昨夜、サークルで仲が良くなった友人とお酒を飲んだもののその残滓たる頭痛が僕の思考を強く打ち付けていた。足取りは浮ついた大学生の誰よりもしっかりしているけれど、前に足を踏み出すことを憂鬱に感じるのは、致し方ない事だ。

「犯人探しというのもなかなかに粋なものだと思わないか」

「思わない」

なんだ、話もう届いているのか、と肩を落とす沢津川にまぁ、と言って手を振る。講堂の、前から四番目の窓際に腰を下ろして、カバンで彼との区切りを作った。

「でも、コンビニ強盗を捕まえることができるのは、しっかり強盗に遭遇した俺らだけだと思わないか。思うだろ、俺は思う」

コンビニ強盗のあらすじについては、こいつが横で滔々と語っている隙に、ＳＮＳで把握したのだが、こいつがそれに巻き込まれているとは思わなかった。沢津川は昔から、こういう面倒なことに巻き込まれがちだ。蛇みたいな目をしているのが悪い。

「いや、むしろ、俺しかいないと思うんだ。あいつを捕まえられるのは」

「日本の警察なめるなよ」

僕は警察に詳しいわけではないけれど、そう言ってみる。

「いいや、あの強盗は一人じゃなかったんだ、複数犯だよ。しかも、知的に最初に防犯カメラを壊していた」

「そんなことしている隙に通報されそうなものだけど」

「三人で来ていたからな」

「でも、客もいたんだろ。目撃証言もあればすぐ捕まるでしょ」

三人で来ていたことが、通報されないことにどう結び付くか分かってはいなかったのだが、沢津川じゃその説明はできないのだろうな、と分かり口にはしない。

「ところがどっこい、店にいた客は皆こう言うんだ」

彼は唇に手を当てて低く呻るような声を出す。

「三人とも頬に大きな傷を作っていて黒い大きな縁のメガネをかけていました」

「それ、誰の真似なんだよ」

「店内にいたピンクのゴスロリを着たおかまだ」

「強盗よりもそっちが気になるな」

そんな悲しいことというなよ、沢津川がへこんだ真似を一瞬だけするが、すぐに元の顔に戻ってまた唾を飛ばして話し出す。

「確かにあれは生々しい傷だったけれど、あれはフェイクだ

ね」
　僕は、先週の金曜に流れたハリウッド映画を思い出していた。いや、あの車をいくつも壊す映画はハリウッドではなかったかもしれないが、ともかく、皆が全身に生傷を作る、そんな激しい映画だ。
「顔に大きな傷があって、メガネをかけていたら、そりゃ目撃した人はその特徴を言うだろうよ。あいつら、頭がいいね」
「それが普通の傷だって可能性は」
「ないね」
　俺の勘がそう言っている。
　沢津川は自信満々に、そう断言するが、残念なことにこいつの勘が当たったことは、出会ってこの方一度も、無い。

「それで、犯人は捕まったの？」
「捕まったよ。その講義が終わったころにネットニュースに載っていた」
　それは残念。カフェのソファー席に座る結愛がほほ笑む。大学から程遠くないこのカフェは個人経営でこぢんまりとしているが、家具や内装にとても凝っていて自然と長居してしまう。基本的にはさほど繁盛している様子はないから、長居もさほど問題だとは思わない。
「沢津川君も残念だったね」
「いや、それがそうでもなさそうで次の日にはその強盗犯が脱走した、という話をどこからか入手してその犯人を捕まえると躍起になっていたんだ」
「話題に事欠かないね」
「あいつといると、心が休まる暇がないよ」
「その割には、嬉しそうに話すけれど」
　そんなはずはない、言ってストローを吸い上げるが、グラスの中の液体はもう切れていて、氷がカランと虚しく鳴るだけだった。また、結愛がほほ笑みながらベルの鳴ったドアに手を挙げる。
「噂をすれば」
「ほら、噂をするから来てしまったじゃないか」
「お前の方から呼んでいてそれはないんじゃないか」
「そう言われる原因が自分にないか、胸に手を当ててみてくれ」
「ないな、俺は過去は振り返らない主義なんだ。ルームミラーばかり見ていたら事故を起こしてしまうだろう」
「でも、適度に見ないとそれも事故の原因だ」
「そういうつまらないことを言うから、彼女を寝取られるんだ」
　その話はこの前でおしまいじゃなかったのか、僕は手元にあった手拭きを投げつける。大学に入って初めての彼女、恐らく十代最期だろうという彼女、僕と同じテニスサークルの女の子に、三か月ほど前告白されて付き合うことになった。
　テニスサークルの同級生で、お互い背伸びして入ったサークルということと、犬を飼っているという共通点があり意気

投合し、気がつけば、僕も彼女のことを好いていたように思う。
　言い訳がましく馴れ初めを飾るのは未練がある証左だ、と沢津川に笑われた日を思い出すと、とうに喉を通過したコーヒーが今になって苦く感じる。
「犬を飼っているという共通点が無くなったからフラれたんだな」
「小次郎だっけ。死んだんだっけ」
　沢津川はデリカシーもなく、そんなくだらない共通点がきっかけだと別れ方も下らなくなるよな、と笑う。
「昨日フラれたばかりの人に言われたくはない」
　昨日深夜一時頃のことだ。沢津川の住むマンション近くの公園に呼び出され、寒空にさらされたまま、時々くしゃみをして、彼の告白をなぜか、深夜に、眺めさせられていた。その話を結愛に話すと、さすがの沢津川も、申し訳ないと思っている、と頭を下げる。
　なんて事は、一切ない。
「計画的な失恋なんだよ、あれは」
　どういうことだよ、と聞くわけもない。聞かなくても沢津川という男は勝手に話し出すし、余計なことを積み重ねて自信満々の顔を見せる。相手を言い負かそうとするときの顔だけは、少し頼りがいがある。
「俺みたいな成功が多い人間と、ヤリチン先輩に寝取られるようなお前じゃ、何かと不公平だろう。それにもし、人生に於いて成功の数と失敗の数が決まっているなら、ここいらで一つ失敗していたほうがいいだろ」
「沢津川君はあれだ、好きな食べ物は最後に残しておくタイプだ」
　結愛は、沢津川が落としたお手拭きを拾いながら言った。
「いいや、最初に食べる。叶えられる幸せを先延ばしにするのは愚の骨頂だ」
「なら、昨日の彼女と描く幸せも先延ばしにしない方がいいんじゃないか」
「服部、それは詭弁というんだよ」
「沢津川、それを強がりというんだ」
　僕は、彼の注文したアイスティーを横取りして、三分の一ほどを飲む。デリカシーのない沢津川に遠慮してやる必要もなく、というよりも先に僕のショートケーキのイチゴを食べたのはこいつだ。
「で、今日はなにか話があるんだろ」
　例えば、その元カノが言い寄ってきた、だとか。沢津川は下卑た笑いを浮かべて、結愛に注意されていた。僕は、時計で今の時刻が、一五時を回っていることを確認すると、口を開いた。
「沢津川、俺は用がないとお前を呼びつけたらいけないのか」
「いや、いけないだろ、俺とお前はそんな仲じゃない」
「用があるなら、律儀な俺のことだ、お前の方に出向くよ。お前を呼びつけたのは、お前が暇だろうと思ったからだ」

「例えば、俺が大企業の社長だったとしてもお前は同じことをできるか」
「沢津川は大企業の社長ではない。居酒屋の、嫌われアルバイターだ」
「例えばだよ、例えば。あと嫌われてない」
沢津川は思い当たる節でもあったのか、嫌われていないよな、と結愛に問いかける。彼女は、彼女で思い当たる節があるのか、首をかしげて、口を開かなかった。
「で、今日の話だけど」
「あるじゃねぇか」
「ないとは言っていないだろ」
「振られる原因は、そういう素直じゃないところだ」
と言う沢津川の声は無視して、二人に話しかける。
「なに、これ」
「カレンダーって言うんだよ。沢津川君知らないの？」
結愛が少しだけバカにしたような目で言い放った。そのこと自体にも驚いたが、何より沢津川がその言葉に突っかかって行かなかったことが一番の驚きだった。
「いや、それは分かるんだけど。去年のカレンダーを渡されて、どうしろと」
「いや、長い事書道していたから、カレンダーに字を書いてメルカリで販売していたんだけど、それ売れ残り」
「これは、新年早々呼び出してする必要のある話なのか」
「大企業の社長さんは年始めくらいしか時間がないんじゃないかと思って」
結愛は噴き出して、沢津川は呆れたような顔を向ける。
「前置きはいいよ。本題はなんだ」
「残念、これが本題なんだ」
まるで小説の一文を抜粋したような言葉を吐く彼に現実を突きつけてやると今度は大きな息を吐く。店内は程よい暖房のおかげか、彼の息が白く濁ることはなく、いや、彼の発言自体はいつでも濁り切っているから、息だけだと澄んで見えたのかもしれない。が、とかく、彼の息は目視できずに誰かの肺へと導かれた。
「大企業の社長は年明けでも忙しいんだ」
そう言うと、彼は席を立って、五百円玉を一つ、テーブルに叩きつける。午後からは最近始めた演劇サークルに行くと言っていたことを思い出したが、サークルに入ったきっかけには昨日フラれたばかりではないか。
「俳優でも目指しているの？」
結愛は時々鋭い言葉を吐く。今のように、悪気はなくともすこしだけ何かに熱中しているような人を見下した物言いになるのだ。沢津川はそういう潜在的にまぎれた悪意を歯牙にもかけない。
「俺みたいな人間は俳優にはならないし、なれないよ」
「そんなこと、分からないよ。案外向いているかも」
「いや、なれないね」
そう断言する理由はなんだ、僕は未だ問うことをしないが、

問わずとも彼は勝手に答える。沢津川は、問題ないことを問題にするプロだ。例えば、三角定規はあるのに、なぜ四角定規はないのだ、とか。
「俺の勘だけど、向いていないし、ならない。目指してもいない」
結愛は、すこしだけ残念そうに、そう、と漏らすだけに終わった。
「じゃあまた、明日」
手を挙げて言う沢津川に明日も会わないといけないのか、そう辟易しながら去り行く彼の背中に声をかける。五百円でおつりが六〇円出るアイスティーは飲み切っていない。冬なのにアイスを頼むからだ。
「金、足りないよ」
「いや、足りるだろう」
「沢津川はこの店のメニューをすべて覚えているのか」
「覚えていないけど、勘だ。足りる」
僕たちの席がドアに近かったため、彼はドアに掛けていた手を放して、背を向け直し、その場で言葉を交わす。また、勘だと宣う。
彼女が、卓上の伝票をちらと眺め、首をひねる。小ぢんまりとした店、備え付けのエアコンから吐き出される暖風、身長の高いマスター、新聞を広げながらもこちらに視線を送っているサラリーマン、穏やかに窓の外を眺める初老の男性、飼っている猫にでもやられたのか、顔に大きな傷をつけていた。
「カレンダー代、五百円でいいよ」
彼の勘は、往々にして、当たらない。
「少し後輩に慕われているからって調子に乗らないでもらいたいんだ」
「確かに、この話は沢津川には酷い仕打ちかもしれない」
「自覚のある悪意というのが一番タチがわるい」
「別に、悪意はないよ。それに、無自覚の悪意のせいで嫌われる沢津川よりはましだ」
結愛はどう思っているのか分からないが、その辺にしてあげて、と彼を憐れむ。憐れむ必要なんて微塵もないというのに、結愛は微笑みを崩さずにいる。
「それに、聞いたか。あいつら、また現れたらしいぞ」
脈絡や、僕の揶揄を無視し、話を続けた。
「あいつらってどいつらだ」
「俺が今まであいつらなんて称を使ったことがあるのは一度だけだろ」
「あぁ、学際でバンドやってチヤホヤされていたあのイケメンたちの話か」
あの話を今も引きずるなんて心が小さい男だ。結愛の話によると、小さいのは本当に、心だけらしい。
「二度限りだったな」
結愛が、沢津川の手元にある空のグラスを卓の隅に置いて、

僕が店員を呼ぶボタンを押す。二月、早生まれの僕ら三人は、未だ堂々とティーンエイジャーを冠している。しかし、肩書きというのは言葉の通り肩にかかれているわけではないから、大学生はもう、ほとんど成人みたいなものだ。最近やっと飲み込めるようになったビールを二杯、注文する。

「あの、九月のコンビニ強盗だよ」

「そんな話もあったね」

結愛が優しく相槌を打って、本当の話なんだな、と安心がわく。

「そんなことあったか」

「記憶力のない奴が一番に死ぬ。過去の失敗を経験に反映できないお前は、何かの事件で真っ先に死ぬね」

根拠のない話だし、聞き流すに限るが、僕は別に忘れていたわけではない、話を盛り上げるため、彼の話す時間を拡大するため、わざと忘れて見せただけだ、嘘じゃない。

「そいつらが脱走したって話、本当らしいんだ。また、現れたらしい」

本当は、忘れていた。

「で、それがどうしたんだ」

「確か、去年のコンビニ強盗の時、店内にいたんだっけ」

「そうだ。結愛はきっと長生きする」

「記憶力がいいから？」

「それと、勘」

結愛は根拠がないよ、って言って笑う。勘に根拠がない、とは言われがちなものの、その勘は無意識下で今まで蓄積された情報を精査し、思考では結びつけることのできない経験同士が作用しあって出てきた未来予測なのだ。畢竟、勘というのは僕らが思考でたどり着くことのできない領域の現状へ対する回答例である。

でも、沢津川の発言には根拠はない。適当な言葉を勘だと宣っている。

「それがどうかしたの？」

「まさか、前と同じように現場にいた俺にしか捕まえることができない、とか言うんじゃないだろうな」

「それはまだ言わない。ただ、強盗する理由が知りたいんだよ」

「確かに、それに至る情動ってのがあるのかもしれない」

結愛は、顔に似合わず酒豪ならしく、先ほどから僕らよりも速いペースでグラスを煽る。

「服部、心理学部だろ。そういうの分かるかと思って」

「理論上は、分かるはずだよね」

「教えてくれよ、何で俺の親父は小遣いをくれなくなったんだ」

「それは、知らない。僕も沢津川みたいな男が息子なら小遣いあげたくないな」

でも、それは自業自得だと言わざるを得ないだろう。むしろ、ひと月前彼の父が密かに集めていたアダルトグッズを発見して母に漏らす少し前まで小遣いをもらえていたこと自体

がおかしいのだ。
「私も、沢津川にはあげたくない」
「だから、受け子って奴をやってみたんだ」
　失望した、と言うべきであるなら、沢津川に対して何らかの希望を抱いていなくてはならないし、思った通りの愚行だと言いたければ、沢津川について考える時間を設けていたことになる。
「結愛は、そんなに飲んで、大丈夫なのか」
「多分、死にはしない。沢津川も私は長生きするって」
　わざとらしく話を逸らすが彼は気づかない。いや、気が付いた上で話し続けているようにも思える。
「あぁ、オレオレ詐欺の末端な。お金を受け取るんだ。それだけで三万貰った」
　見損なった、と言いたいが、もともとこいつは普通の人間から何かが損なわれた状態の生物であると思うし、そこまで非常識な人間だったのか、と思い直すには普段の行動がもう少し常識に則ったものである必要がある。
「これでお前は晴れて犯罪者というわけだ」
「法は確かに犯したが、これが罪なのかと聞かれると俺は頷かない。だから犯罪者ではない」
「法を犯した人を犯罪者って呼ぶって、この前ぽたぽた焼の後ろの豆知識欄に載っていた」
「俺だって、未成年飲酒は犯罪だと、マメシバに教わった」
「実写劇場版どんぐりの背比べ、って感じの会話だ」
　確かに、と三人笑う。その笑い声がタバコの煙に混じって換気扇に吸い込まれてゆく。すっかりペースダウンした沢津川を眼前に据えながら僕はビールの最期の一口を煽る。
「不思議に、罪の味はしない」
「人は生まれながらに罪を背負っているっていうし」
　そういうことじゃないだろ、と未だ頬を赤らめない結愛に、沢津川が正しく諭す。顔には出ないけれど、いつもよりも饒舌な結愛は沢津川よりも少し、厄介だ。
「俺は、犯罪者の心の内を知りたくて受け子をしてみたんだ」
「どうだった。コンビニ強盗の気持ちが少しは分かったか」
「いや、わからない。だから服部に聞いている」
「僕が心理学を学びながら分かったことは、人の心の仕組みを理解することはできても、どうでもいい人の感情に理解を示すことはできない、ということだ」
「なるほど」
「あとは、心理学を少し学んだくらいでは自分の感情をコントロールすることはできない」
「だから彼女と喧嘩別れするんだ」
「沢津川君だって、告白してくれた子に酷いこと言ったでしょ」
「顔だけで選んでそうだから試しただけだ」
「沢津川、そういうところだ」
　僕らは、罪を犯しながら日々を連ねている。といっても過言ではないほど、自分たちの行動は無知ゆえの浅はかさに溢

れていて、それを見せまいと理性や、底の浅い知性で覆うから誰からも理解して貰えないまま学生生活を浪費する。
だから、何かの流れに任せて本音を吐いたり、シンプルに飲みすぎて吐いたりする。罪を重ね続ける僕らが向かうべきは、罰を受けることではなく、罪を認めることなのではないだろうか。
とかくに、僕は飲みすぎたからもう、成人するまでお酒は控えることにする。
「ただ、コンビニ強盗にも何かの理由があってそれをしているはずなんだ。それが分からないというのは悔しくないか」
「沢津川君はやっぱり、演技が好きなんだ」
「何でそうなる」
「体験型って言うのかな。何かを知りたい、経験したい、理解したい、それの根幹にあるのって始めた演劇の影響じゃないのかな」
「確かに、前までの沢津川は、コンビニ強盗は俺が捕まえる、としか言ってなかっただろ」
なるほど、と結愛のありふれているような言葉に合点がいって、言葉をつづけた。しかし、ながら、彼は腑に落ちない様子だ。
「そんなんじゃないよ。理由はもっと穢いんだ」
「それでも、沢津川君は、少し、変わった」
確かに、変わった。いい方に変わったのかは分からないし、なお厄介になったのではないかとも思う。手に負えなくなるのも時間の問題かもしれない。
「もともと変わっていたけど」
結愛も、大概厄介だ。
三人のグラスが空になる。十五分前にラストオーダーを聞きに来た際、何も頼まなかったことを悔いながら席を立った。壁に掛けていたコートをひっつかんで腕に掛ける。
「なぁ服部、知っているか」
会計を済ませると、透き通った空気が停滞する場に出て、身を縮こまらせる沢津川が言う。
「服部の服だけではっとりって読むらしい、部は何も読まないんだと」
「それは、知らなかった」
「だから、お前は半分空っぽなんだよ。そして、それと同じく、人生の半分には意味がないし、読み仮名のふられていない出来事がある。でも、それらがなくても、人生は廻ってゆくよ。部がなくても、お前ははっとりだ」
根拠なんて、どこにもないことが分かっている。沢津川の言うことだ、何も慰めなんかじゃなくて、半分は自己顕示に呑まれた言葉たちで、それらが僕の心を揺らすなんてことは欠片も無くて、それで満足していた。
「だから、顔上げようぜ。父親が死んだくらい、なんてことはない」
でも、今までへらへら喋っていた奴がこんな口を堅く結んで、目を潤わしてギリギリ聞こえるくらいの声量で、絞り出

した言葉に、救われないわけがない。
「沢津川、知っているか」
結愛は、沢津川のこういうところに惹かれたのだな、と合点が行く。彼が、何かを試すように人と接するのも、適当な言葉でいろんなことをけむに巻こうとするのも、悪意のない悪意でひとに嫌われるのも、彼の人格の本懐、沢津川の優しさの真実なのだと。
「お前、上着、店に忘れている」
さっきの沢津川の言葉がなければ指摘せずに後日取りに行く姿を笑うところだが、今回は、そうしなかった。
「そういうことは早く言え」
店に戻る背中を眺めながら、僕は、父の最期を振り返っていた。
「私の友達に、早紀って子がいるんだけど、その子自殺未遂した後半身不随になってね。それが治った後、口癖になっていた言葉が『すべてが正しい』だったんだ」
「なんだそれ。酷く陳腐じゃないか」
「だよね、でも、リハビリ中にその言葉に救われたんだって」
「使いまわされている言葉だと思うけど」
「でも、その言葉を誰が言うかで変わってくるんじゃないかな」
結愛は、沢津川が消えて行ったドアを見つめて続ける。
空が暗い、父が死んだ日よりも、街灯が近くに見えた。
「現に、今沢津川君の言葉に泣いているでしょ。あんなに陳腐なのに」
「その通りだ」
地を踏む足を眺める。沢津川の絶妙な器用さに、また泣きたくなってくる。一度感動してしまうと不思議で、沢津川の今までの言葉に説得力がある気がしてくる。
なんて、事は、無い。
「多分、沢津川君わざと上着忘れているよ」
「僕の泣くのを見越して、とか」
「いや、かわいい店員さんいたから」
「あいつの方が、顔で選んでいるじゃないか」
「うん、帰ろうか」
大丈夫、沢津川を置いて帰るなんて、今夜だけの出来事は多分、部の方だから。

服部の半分はハッタリだ、口癖のように言うようになるとともに、僕らの関係は、少しばかり停滞の時を迎えていた。
お互い、忙しさが増した。
結愛は、バイトのシフトを増やし、沢津川は演劇に勤しむようになった。彼の変なところは相変わらずだったようで、疎遠になっても噂は時々耳にする。
例えば、公園の鳩と一緒に駆けまわっている変人がいた、だとか、酷いものだと、素面であるのに鯉のいる湖に飛び込んだというものまであったが、その話を聞いて出た僕の感想は、彼の苗字が服部であるべきなのでは、ということだった。

それくらい、彼の言動が空虚なものに見えていたのだ。
父を亡くしてから、初めての僕の誕生日を二日後に控えた僕は、首元にコートの襟をかき集めて、駐輪場から講堂へ向かっていた。
別段、変化しない日常が、あと二年と少しすると終わる。それ自体に悲しさを覚えることはないが、残念なことに高校を卒業してからまだ二年も経っていないのに何ら変われている気のしない自我が、冬風に当てられて疼く。
環境が変化するにつれ、何かが変わっていくと信じていた頃が懐かしく思えた。実際、自分が変われるのは自身の半径一メートルの環境が変わった時だ。
学校だとか、職場だとか、そういう大皿が変わったくらいで、乗せられている料理に変化は生じない。一緒の添えられる感情や、手の届く範囲にいる人間が変化して、やっと、自分の在り方に気が付ける。
そう、願っている。
「だから、俺らは変わるべきなんだと思うんだ」
「随分と変人なお前が言うと、言葉の価値の低迷が著しく際立って嫌気がさす」
「本音は」
「ちょうど、退屈していた」
沢津川と顔を合わせたのは二週ぶりだったか、彼が興奮気味に僕の隣に腰掛けると、あの時の奴らが、と話し始めた。
「バンドの奴らか、揃って大学辞めたな」
「それも朗報だが、コンビニ強盗の方だ」
それは、なんの話だったかな、と首をかしげてみてコンビニ強盗、と復唱する。沢津川の話によると記憶力の低い人間が先に死ぬらしいが、それに則って言うなら、僕の寿命が少し伸びた気がする。
「それが、どうかしたの」
「一度だと偶然、二度あると運命、三度あると必然だとニーチェだかフロイトだか、ユングだか、サワツガワだかが言っていたんだ」
「偉人が急に胡散臭くなる一言だね」
「この前、また強盗に遭遇したんだ。つまり、これは運命だということだ」
「どんな運命だ、それは」
「俺が、こいつを捕まえるという、運命とか。そういうものだ」
沢津川は、恋する乙女という風に嬉しそうに話す。そう言えば、結愛と沢津川はうまくいっているのだろうか。
「ちなみに、四度あると何になるんだ？」
「それは、多分、ドッキリだろ」
「なるほど」
だったら、俺が数奇な出会いをもう一度果たせば、必然、さらにもう一度歪んだ出会いがあれば、それを含めてドッキリということになる。そうで、あってほしい。沢津川との出会いなんて、結愛との出会いなんて、服部の半分にも満たな

い出来事で、鼻であしらいたくて仕方がない。
「じゃあ、明日いつものカフェに三時だ」
「なんだ、居場所とかは分かっているのか」
「俺が誰だと思っている、ハッタリなんかじゃないからな」
「お前の苗字が服部だったらよかったのにな」
「そんなプロポーズはいらない」
そうじゃない。僕は彼のケツを手持ちのリュックで殴ると原付に跨った。
この時、頬を過った風が含んだ期待は日常の変化と、それと、明日訪れる僕の成人への期待だったはずだ。涼風が頬を裂く音がする。
期待が、胸への刺激を強める感触が、思考の大部分がこれからの展望にまみれていく響きが、這い寄る。
だから、僕の黄金期はこの瞬間までなのだと、声を大にして言おう。

「結愛は来ないのか」
「なんか用事あるって」
相も変わらず、小ぢんまりとした店内、流れるジャズの音、ハンサムな店長が、迎えてくれる。
「久しぶり」
挨拶をしてくれる店長は、ひげを生やし始めてダンディさが増している。少し僕の未来について妄想を広げてみたが、僕の将来にひげは似合わない。
「沢津川にも似合わないよ、ひげ」
「いや、俺の将来にはミニマリストと、ひげが似合うんだ、これは、決定事項だ」
「ただの勘だろう」
「そういう解釈もある」
「お前の勘は当たらない」
それはさておいて、と沢津川が話を始める。
「今日奴らが狙っているのは大学前の郵便局だ」
「大学前好きだな」
「多分、大学生活を満足に送れなかったお前みたいなやつが犯人だろうよ」
概要は、夕暮れ閉店前の郵便局に三人で現れるところに僕ら二人で居合わせてとっ捕まえようじゃないか、というものだった。
「あほが過ぎるぞ」
「相手が銃を持っているとか、彼らは強いだろ、とかそういうことを言うのはナンセンスだ」
「なんでだよ」
「俺とお前なら捕まえられるからだ。と言いたいけど、俺らが捕まえる必要はそこまでない」
「先に通報しておくとか」
「何で知っていた、となるだろう。だから、強盗が現れてから電話をするんだ」
「そんなことできるのか」

「OK GOOGLE って知っているか。携帯を没収されたって無線イヤホンがあれば１１０番くらいできる」
「作戦としてどうなんだ」
「うまくいく以外の未来が、無いんだ」
「それは良かった」
　二月の夕暮れ、辺りの木陰が境界線を徐々になくし、輪郭の朧気な誰かの肩が夕陽に飲み込まれる。境のない漉された空気が、僕らの肺を隅々までつつき、履きなれたスニーカーがアスファルトを蹴る乾いた音がした。
「どうせ、死にはしない。強盗に入って人が死ぬことはそう多くないんだ」
　ただの冒険だよ。沢津川はそう締めくくると郵便局に足を踏み入れる。郵便物を送る予定はなかったが、僕らが怪しまれる危険性も考慮して、僕の家から沢津川の家に、郵便物を送ることにした。封筒の中身は、僕の財布にたまっていたレシート。
　局員は、制服に身を包み赤い紐を使って首から名札を下げている。目視で確認できるだけで局員は五人、防犯カメラは三台あった。沢津川が自分の住所を封筒に書き連ねている間、僕は椅子に座って天井を眺めた。
　明日で、僕は二十歳になる。それと同時に何か変わるものが在るのか、と聞かれても法的に約束されている制限が解除される以外、何も思いつかない。明日になっても、僕は僕の日常を演じるし、たまに沢津川と喋って、あぁ、こいつの事嫌いだなとか改めて実感するんだろうし、結愛には沢津川の愚痴に見せかけた惚気話を聞かされる。
　そして、大学生の本懐の多くを遂げないまま大学生活に終止符を打って、これでよかったのか、とか笑って、大人に、なる。
　それが幸せだと、大声で叫べる日が来て、自分の行いの全てを肯定できる気がする。今は、認められない屈辱も、宛のない狼狽も、それも正しいと、そう思える日が来る。自分の正しさに気が付くのは、いつだって今じゃない。そう願っている。
「服部、何しているの」
「天井のシミを数える気持ちに寄り添っていた」
「ふーん、私は仕送り降ろしに来たのに振り込まれていなかったよ」
「いくらか貸そうか」
「うん、大丈夫」
　結愛は、僕の隣に腰掛けてまだまだ寒いね、とぼやく。
「沢津川は、」そこで区切って辺りを見回す彼女に、指さしで教えた。
「あぁ、あそこ、手紙出している」
「誰宛に」
「自分だってさ」
　相変わらずバカだなぁ、と結愛は笑う。何でここにいるのか、と聞く前に仕送りを下ろしに来たと説明されたのだけれ

ど、こんな偶然があっていいのか、とか思う。
「結愛は、家に帰った方がいい」
沢津川は妙に勘が鋭く、僕らの視線にすぐに気が付くと駆け寄ってそう言った。彼女は何で、と首をかしげるが、沢津川は頑なに強盗のことを言わない。
「とにかく、先に家に帰って夕飯を作ってくれ、今夜は鍋がいい」
「ねぇ、服部どういうことなの」
「僕も、詳しくは分からないんだ」
「言わないと分かんないよ」
「言わなくても後から分かるし、後で話す、とにかく帰ってくれ」
「どういうことなの」
小さな諍いが目の前で始まる、同時に、時計の針が四時を告げた。デジタル時計ではあと三秒だけ三時の時間があるのに、だ。それを鮮明に覚えているから、その瞬間響いた銃声は、僕の鼓膜から一生涯離れないのだと思う。
「強盗だ。全員その場から動くな」
「なんて素敵な自己紹介」
「留まるべきその場というものの解釈について話し合おう」
僕と沢津川は、慣れた口付きでふざけているが、目の前に銃を持った大人がいるのだから、流石に焦っている。その証拠に沢津川のふざけ方が、少し緩やかだ。
「え、沢津川これはどういうこと」
「強盗だよ。例の、あの、強盗だ」
予見していたの？　と結愛が問いただす中、局員は一人ずつ縛られてゆく。親指同士をインシュロックで固定されると、店のシャッターが降りる音がし始めた。
「おい、そこの緑髪の男。ここに全員分の携帯を回収して入れろ。もちろんお前の物もだ」
身長の一番高い男は、ひげを蓄えて、呼ばれた男にリュックを差し出す。解放すると同時に携帯は返すから安心しろ、とのことだが、携帯が返ってくる安心よりも、命の安心が欲しい。
「ところでなんで沢津川は髪を緑に染めたんだ」
「こういうときに名指しされやすいだろう、と思ったんだ」
「本当は？」
「役作り」
「本当は？」
聞くと、彼は黙って笑った。その笑顔が含みのあるものだったかと聞かれると、ただの下卑た笑みだったよと笑うほかない。
沢津川は、郵便局内にいた一二人全員の携帯を集めるとそれを強盗犯に手渡した。ここからは、沢津川の予定通り通報するだけで、僕らの仕事は終わる。
「ねぇ、これ少し焦ったほうがいいよね」
結愛が不安げな顔で僕らに向き直る。二人ともインシュロックを指に通されて自由に身動きを取れないでいた。沢津川

はワイヤレスイヤホンを忘れたと宣い、僕はじゃあどうするんだと怒る。はいそうですかと流せない内容でも、ひとたび文章に起こせばつまらない一幕に映る。
「黙っていろ」
と銃口を突き付けられ、背中に冷たい汗が通った。暖風で満ちた部屋だが、震えが止まらず、沢津川の堂々とした姿に、羨ましささえ覚える。
「冷静に考えて、犯人たちは三人、今まで強盗はしたが殺人はしてない、銃を撃ったから今頃もう通報はされていると思う。さほど焦ることではない」
頬にできた大き目の傷、黒く太い縁のメガネが、特徴的な三人組が、ほくそ笑んでいる。
「あのヒゲ、前見たときはなかったけど。生やしたのかな」
「そういう気分だったんでしょ」
彼の落ち着きぶりに感化されて軽口をたたくが、今度は声のしゃがれたおそらく最年長の人に銃口を向けられてまた、体中の汗腺が開く。
「なぁ、俺は気になっているんだ」
視界の隅では、郵便局員がバッグに金を詰めている、それを見張る長身のひげを蓄えた男がいて、目の前には、サラリーマンの風体で髪をかきあげ固めている男と、先ほどの老人がいた。
しかし、沢津川の声にこたえる声はなく、客として来ていた人質たちは余計なことをするなと言わんばかりの冷たい視線を向けてくる。
「俺は、気になっているんだ」
残念なことに、強盗犯は沢津川という人間を知らない。こいつは、聞かれなくても勝手にしゃべりだすし、問いのないところに回答を生み出すような人間だ。
「何で犯罪をするんだ。常識的に、とかいうつまらない事を言いたいんじゃなくて。普通に、ダサいよな」
誰もかもが黙りこくっている。泣き落としの逆を行く鬱陶しさで、この場の空気は明らかに暖房では歯が立たないほどに冷めている。僕は胃が痛い。
「ダサいというか。なぁ、なんなんだ。何でそんなことをする必要があるんだ」
そこまで言って、沢津川は黙る。しばらくの間、誰かの荒い息遣いと、腹を立てた犯罪者の足踏みと、時計の針の音だけが郵便局内を満たす。
徐々に暗くなっているであろう店の外、シャッターが下りているせいで何も見えない。おそらく野次馬が満ちていて、僕らを悲劇の主人公にでも仕立て上げて、携帯の背面を向け、ＳＮＳに上げるよう、準備をしている事だろう。
しかし、この空間は、酷く静かで、誰かの携帯のシャッター音も響かない、誰かのＳＮＳの通知音もならない。それはまるで現代の煩わしさの根源から解放されたような心地よさもあり、それでも、僕らは明日生きているのかと、その昏い展望に目を伏せる。

「お前には、分からない」
　同時に、耳の入り口をパトカーのサイレンが掠める。それが耳朶をしっかりと叩いた時、ここにいるほとんどの人に安堵が灯っただろう。
　しかし、三人はそうではない。
「俺には、分からない。大して興味もない。三角定規はあるのに四角定規がないのは何でだ、とか考える方がよっぽど有意義な時間を過ごせるとも思う」
「定規はたいてい四角だろうが」
「正方形の話だ。身長が高いからって長方形しか浮かばない思考ってのも貧相なもんだな」
　隣に座る正方形体形の服部を見ろ、その上半分はハッタリだ。続ける沢津川に、僕は苦笑いを零すしかない。
「俺は、お前みたいな想像力がない奴が一番嫌いだ。社会の何たるかを知らない、下半身情事にしか興味のない大学生に、俺らの懊悩が見えてたまるか」
「否定はできないな。下半身と世界平和にしか興味がない」
　沢津川は立って詰め寄る。デブとじじぃはその場に立ち尽くして、観客の僕らは彼の背中を盾に小さく縮こまって震えていた。遠くのサイレンがけたたましく鳴っている。
　沢津川の顔には自信が、彼らの顔には焦りが滲みだし、ひげを蓄えた男が沢津川に銃口を向けスライドを引いた。
　彼らは、僕らの手の届くところにはない懊悩を抱え、それから逃れようと、沢津川に銃を向ける。前回の強盗も、脱走も、その次の強盗も、今回も、彼らはその度に負う必要のない罪を重ね、消えない罪悪感を背負いながら生きてきたのだろう。
「お前らが求める想像力ってのは、自分を理解しようとしてくれる、一方的な努力の事だろう」
　例えば、僕がいつも考えるような、沢津川を分かりたいというようなそういう感情。
「そんなものは、何も生まない、何にも成らない、本物に近づくことさえできない」
「人間なんて、皆大抵そうだろう。自分を理解してほしいと願っている」
「理解してほしいと宣う奴ほど、理解されないことを美徳としている。みっともない。これは少し自己紹介も兼ねている」
　安全装置の外れる音が響いた。いや、僕は銃を触ったことがないからこれがそうなのかは分からないが、とにかく、沢津川が撃たれるという予感だけがあった。
　それもありかもしれないと、僕はそう思う。
　しかし、僕が声を上げるよりもさらに早く、結愛は立ち上がっていた。
　暖房の風が吐かれる音が止まる、サイレンが鳴り響く、車のブレーキ音、ドアの閉まる音、結愛のヒールの音、それらが不協和音を起こして、先ほどの無音は嘘かと思えるほどに、情報過多の中に放り込まれていた。
　その後鳴り響いたのは、銃声が先だったか、悲鳴が先だっ

たか、沢津川の高らかな笑い声が先か、僕の、しゃくり声が先か。
乾いた、スニーカーの擦れる音が先か。
もう覚えていない。

×　×　×

僕の黄金期を語るうえで外せない人間が三人ほどいる。いや、黄金期だった、と今なら言えるけれど、あの時の僕はそんなこと思っていなかったはずだ。
それは、時間という薬が傷をいやしてくれたのか、時間という毒が思い出を蝕んだのか、それとも、僕があの延長戦から外れて立派な大人になったからなのかは分からない。
あの日までは得ていなかった、成人の勲章を湛えたグラスの中で、角ばった氷がカランと踊る。
無機質な部屋に、足音が忍び寄る。落ちたままのカレンダーに視線が行く。『自分の正しさに気が付くのは、いつだっていまじゃない』そもそも正しさってなんだよ、と沢津川に聞かれたときは、沢津川がバイト先の人たちに嫌われているというのは正しい話だ、と答えた。
「来ていたのか」
「まぁね。久しぶり」
「そうでもないだろう」
「もう、死んで一一年。あのカレンダーと暦が完全に一致したよ」
「そうだな」
僕は、壁にもたれてテレビを眺める。鼻に付く俳優が、感動モノの物語を見て涙を流す。この後出てくる言葉なんてのはお決まりの定型文で、大して中身もない、所謂、部、の部分にあたる言葉だろう。
「勘、いくつ当たった？」
「一つだけ、当たった。散々お前の勘は当たらないといわれて、一番当たってほしくない勘が当たってしまった」
「あれだけなれないって言っていたのに、あれだけ似合うって言っていたのに、どちらの勘も外れた」
「そうだなぁ、でも、こうしてテレビに映る自分を見ると、凄くむず痒くなるよ。ひげも、ミニマリストも似合っていない。もっと、口うるさくてしょうもないことに固執するのが俺なのに」
沢津川は、テレビのチャンネルを一周眺めるが、また、先ほどの番組に戻して、もう一度ひげが似合ってないなぁ、と嘆く。
「服部の苗字の半分はハッタリで、人生には意味も、思惑も、企みもない時間が半分くらいあるって言っていたけど」
ならば、あの郵便局強盗の出来事はどっちだったのだろうか。僕にとって、彼女にとって、沢津川にとって、強盗犯にとって、どんな意味を持っていて、どんな後悔を背負えばこ

の先楽に生きていけるのだろう。
忘れればいいのか、嘆けばいいのか、顔を上げるだけでいいのか。
僕は、壁にもたれて、テレビを眺めている。
僕は、壁にもたれて、部屋を眺める。無機質な部屋、使いかけのコンドームの箱、中身のなさそうな冷蔵庫、グラスが二つ表面に汗をかいている。
壁にもたれて、深く息をはき、口を開いたまま、声を発せずにいる。
指先で二人の背の輪郭をなぞって、あの瞬間を思い出していた。銃声と共に届いた硝煙の香り、その奥に潜んだ芳醇なコーヒーの香り。僕の靴を地面が焦がす匂い。
「正しさに気が付くのは今じゃない、か」
彼は、似合わないひげを擦って漏らす。
「このカレンダーが五百円は高い」
「高い、けど、もう、捨てられるわけないよね」
そんなことはないだろうと笑う。あの五百円は、帰り道のコンビニでクジを引く資金にしかならなかった。
「何もかもが変わっていく。僕らも学生じゃないし、あのカフェもつぶれた。今にならないと正しさに気が付けない」
「だから、間違いに気が付くのも今じゃないんだなぁ、って」
「そうだね。でも、これを俺は成長だと呼びたくないな」
沢津川が、カレンダーを拾い上げて壁に掛け直す。それを結愛は眺めて一つ、涙を流す。
「あと一つ、当たってほしい勘があるんだけど」
「もう勘は言わないんじゃなったの」
「いや、昔適当に言った言葉」
「言ってみれば」
沢津川は、口を堅く結んで、拳を握りしめる。
「結愛は、長生きするよ」
沢津川の勘は当たらない。こいつの勘は適当な口から出まかせで、何の根拠も伴ってはいないから。こいつの言葉に一喜一憂するだけ無駄なはずだから。
じゃあ、何で僕らはこんなにも心臓の奥が響くのだろうか。
鼓動が鳴りやまず、あの時の後悔を淘汰してくれはしないかと、日付変更線への祈りをやめられないのか。
「一つ、いやな勘が当たったん。変わってゆくものばかりで嫌になる。ただ、何か一つだけでも変わらないものが在ってもいいと思うんだ」
「私も、そうありたいと思うよ」
僕は、壁にもたれてその風景を見ている。
見ているだけだ。
無機質な部屋に彼らを嗚咽と、囁きと、後悔と、ささやかな決意が、その希望が彩りで満たす。
僕はその景色を、見ている。
僕の声は、届かない。
見ている、だけだ。
「服部も一緒にいれば、幸せだったのにね」

「服部がいなくなってから、心にできた空白が胸を裂いている」

自分の正しさに気が付くのは、いつだって今じゃない。

この瞬間が皆にとっての『服』であることをソーサーに沁みた汗が、誇らしげに示していた。

使いかけの箱が、空っぽになる、そんな予感が鳴り響いた。